

スヴェトラナ・アレクシェーヴィッチ氏は、2015年にジャーナリストとして初めてノーベル文学賞を受賞した。『戦争は女の顔をしていない』『チェルノブイリの祈り』を読んで、彼女のどこまでも真実を追い求めていく姿勢に、愛情深い、そして、忍耐強い人だと深い感銘を受けた。彼女の父はベラルーシ人で母はウクライナ人で、彼女の国籍はベラルーシで現在はドイツに住んでいる。彼女に、ジャーナリストの金平茂紀氏とロシア文学者の沼野恭子氏がインタビューした。それを、岩波の『世界』の5月号に「『人間らしさ』を諦めないために」と題して、掲載している。彼女の重い言葉を紹介したい。

金平氏のロシアのウクライナ侵攻から1年経ったが、これほど長い戦争になると予想していましたかという問いに「正直に言うと、それが戦争の始まりだとは信じられませんでした。最初の数日間は大変なショックを受けていました。だれもそこで起きていることが信じられませんでした。しかも、こんなに長く続くとは」と答えている。戦争が起きた理由について「まさか外部の、しかも『でっちあげた敵』と戦争するとは、まったく想像していませんでした。（中略）強制収容所を出た人間は、収容所の門を出たからといってすぐに自由な人間になれるものではありません。そこで何を始めるかといえば、自分の知っていること、自由とはほど遠いことです」と語っている。金平氏が、ベラルーシで51歳の女性が泣きながら「私は戦争に反対です」と答えてくれたと話す、彼女は「人々の心は死んでいません。その心をなんとか、恐怖から解放する手助けをしなければと思います。ベラルーシ人にはウクライナ人に対する憎しみはありません。ウクライナ人は兄弟なので、ベラルーシ人はこの戦争を認めていません」と答えている。ウクライナはチェルノブイリ原発事故を経験し、日本は福島原発事故を経験した。福島に行って、見聞きしたことはウクライナ戦争への見方に影響を与えたかという問いに「私は原発事故について『チェルノブイリの祈り』を書くために、立ち入り禁止圏内へ取材に行ったのですが、そこで私が見たのは、核戦争後の世界とも言えるものでした。核兵器が落とされたらどうなるか想像できます。平和的原子力も、戦争用原子力も同類です。別物ではありません」と答えている。文学、音楽、演劇、映画などの分野で、ロシア文化を排斥する動きがあるが、作家、文学者として言わねばならないことはありますかという問いに「私は、現在のようない時代は特に、ナショナリズムの危険性があることを知っておくことが重要だと思います。ナショナリズムの危険はウクライナにもあります。だから、文化に携わる人たちはそのことをつねに心しておくべきであり、ナショナリズムに反対すべきです。同時に、オープンに語るべきです。（中略）憎しみは私たちを救いはしない、ということを知らなければなりません。私たちを救うのは愛であり、私たちは人間として生き、自分自身の中の『人間性』を救わなければなりません」、「愛するよりも、憎むほうが簡単だからです。でも、こういう時こそ芸術家の出番です。私たちが、憎しみでは世界を救えないと訴えていく必要があるのです。救えるのは愛だけだ、と」と応じている。沼野氏が「ブチャ（大量虐殺）以後、文学に携わることができるか」と問いかけられているがとの問いに、「いいえ、私たちは言葉を発し続けるべきです。私たちは人間を育てていくべきです。時として、文化がするりと抜け落ちてしまったら、人は『人間らしさ』を失ってしまうことがありますが、そこで諦めてはいけません。（中略）時に言葉は無力だと感じることもありますが、私はその絶望に負けたくありません。自分の仕事を続けて訴え続けていきたいと思います」と答えている。彼女は言葉の持つ愛の力を信じている。心して聞くべきではないか。